

第百十二話 新戦法創造力と対応力

日本は創意工夫は得意だが、オリジナリティのある戦術の創造は不得手なのだろうか？また、ビルマ戦線でのウィングート旅団のゲリラ戦術に翻弄もされて（？）いるが、戦いは正々堂々とすべきものとの拘りみたいなものがある、作戦にも歯切れがないように感じるのだが・・・

1 グライダーを使用した作戦

(1) エバン・エマール要塞攻撃(1940/5、独軍)

1940年5月10日、ドイツ空軍がベルギーへの空爆を開始した。ベルギー空軍は一瞬にして壊滅し、ベルギー最大のエバン・エマール要塞は、コッホ突撃大隊の一部隊（10機？）が要塞上に着陸し、速やかに要塞を制圧し、24時間で陥落した。グライダー使用は無音性に着目したヒットラーの命

(2) ノルマンディー上陸作戦のトンガ作戦(1944/6、連合軍)

ノルマンディー強襲上陸前夜、英・加軍及び米軍部隊を独軍後方に空挺降下させた。その内、英加軍の作戦コード名がトンガ作戦であり、この作戦にグライダーが使用された。ハワード少佐率いる2個中隊はハリファックス爆撃機に曳航されたグライダー6組に分乗・出発した。グライダーはメルヴィルの東、ノルマンディー海岸上空、高度1,900mで切り離された。奇襲に成功し、ペガサス橋及びホルサ橋の制圧メルヴィル陣地を制圧し破壊し、上陸作戦に寄与した。

2 ビルマ方面軍が悩まされたウィングート少将指揮するチンディット作戦

全ビルマを占領され、英軍は日本軍の後方に部隊を長距離挺進させ、補給を空中から行うことができれば、日本軍の後方攪乱が可能と考え、長距離浸透特殊作戦を立案した。それに使用するための部隊として、77印度歩兵旅団を基幹とするチンディット部隊を編成し、二次にわたる作戦を敢行した。

(1) 第一次チンディット作戦 1943(S18)年

1943年2月8日、部隊3200名は7個縦隊に分かれインパール方面からビルマ北部へ進入した。各縦隊はアラカン山脈を越え、二つの大河を渡河し、日本軍陣内奥深く侵攻した。日本軍は第十八師団を中心に各地から部隊をかき集めて掃討を試みたが、チンディット部隊は優勢な敵と遭遇すれば分散して後退の戦法を採った。小部隊の悲しさ、空中補給も厳しくなり、3月24日、各縦隊は後退が命ぜられた。帰還将兵は2182名だが、航空補給があれば敵陣内やジャングルでも長期間作戦行動可能であることを実証した。

(2) 第二次チンディット作戦（サーズデイ作戦）

1944(S19)年2月、2回目のビルマ侵入作戦が開始された。3月5日、74機のグライダーを使用した空挺作戦により、3個旅団9,000名がマンダレー・ミートキーナ間に降下し、日本軍の後方攪乱、補給路を遮断した。日本軍は部隊をかき集めて掃討に努めたものの、チンディット部隊を完全に捕捉することはできなかった。

3 帝国陸軍

陸軍がグライダーの軍事利用の研究を開始したのは、1942(S17)年頃、1944年「滑空飛行第一戦隊」が編成されたが、比島、沖縄作戦での使用が計画はされたが、遂に実戦使用されることなく終戦を迎えた。

* 新戦法の評価は分かれるところではあるが、斯様な作戦を敢行し得る軍の柔軟性には敬意を表す。ゲリラ戦術に悩まされる日本軍を見ていると、兵は詭道であると頭では理解していても、容易に受け入れられない日本人気質があるのではないかと思いたくなる。想定外の作戦に対する柔軟性を持ち得たいものだ。